

Manfred

岡田章子

『マンフレッド』(1816-17)は不可解な作品である。Byron(1788-1824)自らが'dramatic poem'と名付けているが、劇的構成をもちながら、登場人物はほとんど水や大地の精霊達で、対話というよりも独白によって作品が作り上げられている。筋の運びは単純で、脇筋もなく劇らしい事件の展開もなく、一人の主人公の内面の苦悩が描き出されるのみである。しかも彼の正体は定かでなく、その苦悩の原因も過程も最後まで明らかにされず、漠然としたまま主人公の死によって劇は終るのである。作者自身がMurrayに宛てた手紙の中でこの作品について次のように述べている。

I forgot to mention to you that a kind of Poem in dialogue (in blank verse) or drama, ... begun last summer in Switzerland, is finished; it is in three acts; but of a very wild, metaphysical, and inexplicable kind. Almost all the persons---but two or three---are spirits of the earth and air, or the waters; the scene is in the Alps; the hero a kind of magician, who is tormented by a species of remorse, the cause of which is left half unexplained. He wanders about invoking these spirits, which appear to him, and are of no use; he at last goes to the very abode of the Evil principle...to evocate a ghost, which appears, and gives him an ambiguous and disagreeable answer; and in the 3^d act he is found by his attendants dying in a tower where he studied his art. You may perceive by this outline

that I have no great opinion of this piece of fantasy.¹⁾

これによると、作者も説明し得ない作品であると言い、主人公はいわば魔術師で、彼を悩ましていて後悔の原因は半ば説明されないままであり、作品は一編の幻想であるとしている。超自然の精霊の中を魔術師がさまよい、ついに何の解決もなく塔の中で死ぬ。実体のない話はまるで影絵である。William J. Calvert はこの詩を 'projection of a mood on a screen'²⁾と呼んでいるがふさわしい呼び方である。上の手紙にあるように、バイロン自身は必ずしも高く評価していないが、不思議な暗さの中に作者の姿を漂わせながら、読者を惹き付けるこの作品を鑑賞したいと思う。

『マンフレッド』は制作当初から、批評家達は Marlowe の *The Tragical History of Doctor Faustus* や Goethe の *Faust* や Aeschylus の *Prometheus* との類似を指摘してきた。例えば Peter Thorslev はマンフレッドを評してゴシック風メロドラマの悪党とプロメテウス風反逆の人との混合した人物であると述べている。³⁾ 確かにマンフレッドはこれらの主人公と共通点をもつが、それに加えて、*Childe Harold* で描き出されたようなバイロン風英雄の性格をも兼ね備えている。Paul G. Trueblood は Calvert を引用して根底において主人公はバイロン自身であると要約しているが、⁴⁾ 何よりも読者に興味を抱かせるのは、この人間離れした魔術師が、悪党であり、呪われた人であり、プロメテウスのような不屈の精神の人であり、しかも作者バイロンである複雑な人間像である。この神秘的な人物の内面を辿ることが本稿の目的である。

冒頭マンフレッドはただ一人深夜ゴシック・ギャラリーで冥想にふけている。彼は自分の魂は呪いにかけていて、恐怖も希望ももつことの出来ない状態であることを述べる。現在も将来もなく、逃れることの出来ない重荷を背負っていることを吐露するが、その呪いの原因は殆ど知らされない。彼自身だけが知っているようである。

Manfred

The lamp must be replenished, but even then
It will not burn so long as I must watch:
My slumbers---if I slumber---are not sleep,
But a continuance of enduring thought,
Which then I can resist not: in my heart
There is a vigil, and these eyes but close
To look within; and yet I live, and bear
The aspect and the form of breathing men.⁵⁾

深夜にゆらぐランプはマンフレッドの罪の意識を象徴するにふさわしい。絶えぬ思いで眠ることも出来ず、仮に目を閉じてもそれは自らの心の内面を凝視することであり、悩みを深める。こうして、苦しみながらも人間の姿をして生きている自分を不思議に思いながら、過去をふりかえる。人によいこともしたし、人の好意も受けた。しかし、善、悪、生命、力などすべてのものが、雨が砂に落ちるように消え去ってしまった。知恵も善意もこの苦しみをやわらげるのに何の役にも立たない。自分は哲学や科学を学び、世界の驚異を制する力をも有しているが、それも役に立たない。こう冥想する彼の姿はファウストである。ここまでは主人公自身も満足のいく生き方をしてきたことを述懐する。それまでの学究や知恵がただあの時（'all-nameless hour'）以来変化してしまったのである。その「時」が現在も将来も決定的なものにしてしまい、逃れることの出来ない悲しみに満ちている。魂は呪いにかけられ、恐れも希望ももつことの出来ない絶望感に陥れた。ここまで心境を語って精霊を呼び出す。学究に励んだファウストは同時に精霊を呼び出すことの出来る魔術をもつ人物であることがわかる。これは彼が魔力をもつ偉大さと同時に超自然の力に依存する弱さをも示す。マンフレッドによって呼び出された6つの精霊達――空気、山、海、大地、風、夜の精――が次々と現れ、「何が欲しいのか」と尋ねる。続いて第7の運命の星が姿をあらわす。彼はマンフレッドの運命を司さどる星のようで、マンフレッドの心の中を知って

いるようである。この運命の星も「望みは何か」と尋ねると、マンフレッドは「忘却」と答えるが、「何を忘れたいのか」という質問には、それは口に来ないという。

Of that which is within me; read it there---

Ye know it, and I cannot utter it. (I. i. 138-9)

彼らはこのマンフレッドの言葉には直接返答せず、欲するものは何でも与えると反復すると、彼は再び「忘却」を望むという。読者はここに彼の中にひそむもう一つの弱点を知る。魔力で呼び出した精霊に対する願いが「忘却」という弱々しいものであるということは、彼のもつ本来の偉大さに比較して、そぐわない印象を与える。これに対する精霊の答えは彼の期待に反したものであった。

We are immortal, and do not forget;

We are eternal; and to us the past

Is, as the future, present. (I. i. 150-2)

彼らにとって生も死も、過去も未来も無関係で、死によって忘れることも出来ないという。マンフレッドは彼らから慰めも解決も得られないことを知る。するとなぜか第7の運命の星が意地悪く美しい女性の姿に変身する。おそらくアスターティであろう。第7の精もマンフレッドの苦悩を知っていてしかも一層苦しめようとするのだろうか。マンフレッドはその姿をみて逆上し、昔の恋人であったこと、それが彼の暗い心痛と関わりがあることを暗示する。その女性が去ると、マンフレッドが倒れ、呪文の声が聞こえる。彼の暗さに一段と神秘的な雰囲気を加える。女性が関わった罪悪とその後悔、孤独に悩まされ、しかも呪われて、魔力をも帯びている主人公としての像が確立する。そしてどこか畏怖を感じさせる。マンフレッドへの読者の興味と関心はこの

Manfred

神秘性と畏怖によるもので、実際にドラマの中で罪が実行されたり、直接語られたりしない点が魅力なのである。すべて何かの事件の名残とその暗示によって話が進むのである。これはロマン派詩人によく見られる筋立てで、Keats の *La Belle Dame sans Merci* の騎士の苦悩を思わせる。この騎士も青白い顔をして荒野をさまようが、恋のためであろうか、何か悩ましげな様子で読者の心を惹き入れる。妖精の女との道行の場面、洞穴の中での愛の成就と死が詠われるが、その真相は明らかでない。不確かな苦悩と美を残して物語は終る。マンフレッドの場合はこの騎士よりも遙かに重苦しい雰囲気であるが過去の名残をとどめて話を進める点では類似している。ただバイロンの作品では、主人公は事件を口に出せないけれど熟知しており、その点キーツの作品の主人公は自らも苦悩の原因については不確かなのである。

この一幕一場で設定されるのはゴシックの世界である。城のギャラリーにたたずむ暗い罪を背負った神秘的な主人公と精霊達——彼ら全体が何かの呪いかけられた雰囲気包まれて、読む人をゴシックの世界に誘い込む。第二場では、前場面とは対照的な大自然アルプス山中にマンフレッドは一人登場する。今度は超自然の精霊ではなく、自然の生命あるものがマンフレッドをとりまくが、それは一層彼の孤独感と絶望感を深める。ひとりユングフラウの美しさに見とれながら、この大自然もまた彼を助けることが出来ないと理解する。彼が呼び出した精霊達は彼を見捨てたし、彼が学んだ呪術も頼りにならない。もう超自然の力には頼らぬことにしようと自立心を固めるが、一方で絶望感は深まるばかりである。彼のみじめさを自然の美しさと対照するかのように、山の美しさに呼びかける。

You, ye mountains

Why are ye beautiful? I cannot love ye.

And thou, the bright eye of the universe,

That openest over all, and unto all

Art a delight---thou shin'st not on my heart.

(I. ii. 8-12)

この無類の美しさは自分の汚れた心には輝いてくれないのかと嘆いていると、鷺が一羽とんでいく。その姿の美しさと我身を比べ、バイロンらしいロマンティックな一節を吐く。

Beautiful!

How beautiful is all this visible world!
How glorious in its action and itself!
But we, who name ourselves its sovereigns, we
Half dust, half deity, alike unfit
To sink or soar, with our mixed essence make
A conflict of its elements, and breathe
The breath of degradation and of pride,
Contending with low wants and lofty will,
Till our mortality predominates,
And men are---what they name not to themselves,
And trust not to each other.

(I. ii. 36-47)

目前に広がる自然の美しさに酔いながら、人間は何と粗末なことかと思う。人間はなかば塵で、なかば神性で、飛ぶことも沈むことも出来ず、卑しい欲望と気高い意図が競い合っていると、墮落とプライドに満ちている自らの心境に照らし合わせて語る。自然の崇高さを象徴する鷺に思いを托していると、今度は羊飼いの笛の音が聞こえ、生命への思いをかきたてられる。生命への思いと苦悩を交錯させる心のうちを反映して、'breath' 'breathing' と生の営みを表現する言葉が反復される。これらの言葉とは反対にマンフレッドはすでに足元がおぼつかなく、よろよろしている。山や岩や氷河に生命の息吹

を感じながら、それらに自分の生命を奪ってくれることを願う。ここでもまた彼の弱々しい一面を見せる。大自然の持つ生命力とマンフレッドのはかなさの対照の中に、現実の人間、かもしか狩りが登場する。彼はマンフレッドの事情を感じとるかのごとく「我々の清らかな谷を汝の罪ある血で汚すな」(I. ii. 111) と叫んで自殺寸前のマンフレッドを助け出す。皮肉にも彼が軽蔑した通常の間人であるかもしか狩りに救われるのである。

『マンフレッド』は大半が主人公の独白であるが、この一幕二場のユングフラウの自然描写の持つ意味は大きい。冒頭の暗いゴシックのシーンとの急転換による対比となるばかりでなく、別の側面から主人公の苦悩を浮き彫りにする。自然の力は彼の病んだ心に休息を与えることは出来ない。そればかりか、その自然の美しさの故に彼の悲壯観を深め、ついに自殺に追いやる。暗い城のギャラリーでの冥想の中でも自殺を企てなかったのに、山の自然美が彼を自殺に追い込むのは注目すべき点である。生命あるものの方が、彼を一層絶望的にさせるのだろうか。Andrew Rutherfordによれば、マンフレッドは自分が罪を犯したことを認め、しかもその後悔は当然の報いと認識している。⁶⁾これはバイロン自身の投影である。マンフレッドは尊大で普通の間人とはかけ離れた間人として自ら認めることを望んでいるのである。そのマンフレッドを中心に2つの異種の登場人物――超自然の精霊と普通の間人――が存在し、彼の心を異なった角度で映し出す役割を果たすのである。

こうして第一幕において、暗い城の深夜と輝くアルプスの美しさの全く異なる背景のもとで、どうしようもない苦しみを背負う主人公を設定した。超自然の力も自然美も癒すことの出来ない彼の心の暗い影に読者を共感させるのに十分な基盤を作った。ここまで場面が設定されると、始めてマンフレッドは現実の間人と会話をかわす。かもしか狩りに案内されたアルプスの山小屋で展開される長い対話はバイロン風の超人的な間人と普通の間人の代表との会話である。通常感覚の間人と異様な思いにとりつかれた2人の話を通して少し異なった観点からマンフレッドの内面にせまる。かもしか狩りの立場から、彼は貴族であるらしきこと、しかも下の谷を見下ろす絶壁のひとつに

も例えられるほどの気高さであること、歳もまだ中年にもならぬことなどが推察される。始めてゴシック世界を抜け出して普通の人間としてのマンフレッドの個人的事情が語られる。読者から見れば、少し身近な人物として一層の興味を抱く。しかし次の瞬間、彼は呪われた人に戻る。この健康で純朴な老人の勧めるワインは彼にとっては血を思わせるもので、思わず口走る台詞はマクベスのような台詞である。

Away, away! there's blood upon the brim!

Will it then never---never sink in the earth?

(II. i. 21-2)

ワインをみてアスターティの流された血にうなされる程妄想にとりつかれ、自らの罪をほのめかす。純粹な血が祖先に流れ、若き頃の自分にも流れたが、愛してはいけないうるやり方で愛したからだと言人相手に混乱した口調で過去を語る。驚いた言人はどうかしているのではないかといひ、"man of strange words, and some half-madding sin" (II. i. 31) と驚き、尋常でない人だと悟る。何か慰めを得るように助言すると、今度はマンフレッドは彼の誇り高さを存分に發揮してそれを退ける。

Preach it to mortals of a dust like thine, ---

I am not of thine order.

(II. i. 37-8)

いかにもバイロン風の主人公である。尊大でありながら彼は今まで永遠の日々を生きてきたと主張し、プロメシウスの化身となる。

I have lived many years

Many long years, but they are nothing now

To those which I must number: ages--ages--

Manfred

Space and eternity--and consciousness,
With fierce thirst of death---and still unslaked!

(II. i. 44-48)

永遠の苦悩を耐えて生きる Shelley の *Prometheus Unbound* の主人公プロメシウスの姿を思わせる。シェリーのプロメシウスも果てることのない孤独と苦悩の中で、ジュピターと戦い、ジュピターの威圧を退ける。大きな相違点は、シェリーの方は根本に慈善と人類愛を持っているのに対し、マンフレッドは苦悩が個人的感情であり、利己的であることである。しかしながら、ここでマンフレッドの主張する永遠の生はプロメシウスの姿を重ね合わせるものである。このアルプスの狩人との対話の中に思いがけずマクベスとプロメシウスとバイロン風英雄の三者の融合した主人公が呈示される。どうかしているのだとあきれ、心配する狩人を相手に、ふと思いを転じるようにマンフレッドは狩人の純朴な生活と自分のそれを比較する。前者は謙虚で敬虔で、つつましい誇りがあり、けがれなき健康な生活であると賞であるが、それでも自分の運命と交換する気にはなれないとマンフレッドの頑固な意志を呈示することになる。この場面では彼の生活と正反対の明るさを持つ狩人を対比させて、彼の健康な祈りも慰みも彼の心を救うことが出来ず、彼の絶望を一段と鮮やかに浮かび上がらせる。同じアルプスを背景としながら、今度はまた超自然の力に頼ろうとする。

絶望に陥ったマンフレッドは今度は魔女に心を向ける。谷に一人降りて、滝にかかる虹の下からアルプスの魔女を呼び出して、その神秘性の中に身をひたしたいという。同情した魔女はなぜかマンフレッドのことを知っている。

I know thee for a man of many thoughts,
And deeds of good and ill, extreme in both,
Fatal and fated in thy sufferings. (II. ii. 35-7)

彼女がどうして彼の生涯を知っているのか説明されないが、もしかしたら、彼の内面から生まれ出た化身かもしれない。この魔女の言葉はマンフレッドの内面の要約であり、洞察であり、同時にマンフレッドに心の内を語らせるきっかけでもある。彼のこれまでの行為が善悪共に極端で、その苦痛が致命的で呪われていることも察知している。彼女に促されて、マンフレッドは若いときから人間の魂とは別の道を歩んだいきさつを語り、ファウスト的な孤独を語る (II. ii. 50-5)。彼の喜びも悲しみもすべて生命ある人間のものではなく、荒野を愛し、科学を教えられることもなく学んだと、尋常の人間の範囲を越えていることを話す。それが結局のところ、ある女性を愛して破滅させるに至ったことを語る。先にかもしか狩りを相手に彼の心の一端を語ったが、ここで魔女に向かっていう30行に及ぶ独白に似た長い台詞の中で、さらに詳しく彼の過去を告白する。絶望の中に生きるマンフレッドのことを聞いた魔女は自分に対して服従を誓うなら助けようと申し出るが、彼は服従よりは苦悩を選ぶと言う。これはジュピターを退けるプロメシウスの姿を思わせる。このアルプスの魔女は第一幕で現われた精霊達が全く援助することが出来ないのに対し、条件付きで助ける意図をもつ。少し異なった超自然の力であるが、マンフレッドの心を慰める力にはなり得ない。再び一人になって罪の後悔を独白する。もし自分が生きていなかったら、愛した人は今も生きているだろうし、もし自分が愛さなかったなら、彼女は今も美しく幸せであろうと思案をめぐらし、後悔は深くなる。

次に対面するのは悪魔アリメーヌである。アリメーヌは悪の権化、自然の破壊力の権化である。従者を従えて、復讐の女神メネシスも加わって集まっているところへマンフレッドは姿を現す。彼らの権力と栄光の前にもマンフレッドは屈せず反逆する。また彼らの方から見てもマンフレッドは「ただの人ではない。彼の知識、彼の苦しみは人間の枠を越えたものである」(II. iv. 57-8) と受けとめる。超人間の悪魔ですら "A magician of great power, and fearful skill" (II. iv. 31-2) と感嘆する程である。第一幕で精霊達に「忘却」を願い求め、第7の運命の星がアスターティの姿に変身すると気絶

Manfred

したのと対照的に、今度は死者アスターティを呼んで欲しいという。彼女は墓のない死者で、自殺かなにか不気味さを暗示する。その対面が悪魔の力によって実現されるのも彼女が悪魔の支配を受けていることを思わせる。アスターティの亡霊との対話は彼の心の遍歴が死に近付いたことを意味する。

Astarte! my beloved! speak to me:

I have so much endured---so much endure--

Look on me! the grave hath not changed thee more

Than I am changed for thee. Thou lovedst me

Too much, as I loved thee: we were not made

To torture thus each other, though it were

The deadliest sin to love as we have loved.

(II. iv. 118-24)

亡霊となった彼女の姿以上に自分が罪のために大きく変わったことを知る。ここに至るまで悪霊や精霊や狩人との対話があったが、やはりマンフレッドの願いは彼女に直接話しかけることである。自らの口からこれほどの苦悩が彼女への愛によるものであること、その愛は恐るべき罪であることを率直な言葉で述べる。アスターティは彼の心のよりどころだったのだろうか。これまでの彼の台詞とは異なり、単純な文型に彼の気持ちがこめられて、流れるように語られる。そして今なおアスターティの愛は消えることもなく、それでいて後悔の種であり、死を願わせるものである。これほどの愛の後悔を嘆きながらも彼女に求める言葉は自分への愛の一言である。アスターティの亡霊はただ「マンフレッド」と名を呼び、「明日お前のこの世の罪悪は終る」(II. iv. 152)の一言と共に去ってしまう。彼女の登場は結局マンフレッドの差し迫った死を知らせるのみである。しかし読者から見てどうしてこの世の罪悪が終るのか、どうしてマンフレッドが死ぬのかは不明である。地獄へ引っ張って行こうとした精霊達にも打ち勝ったにもかかわらず死ぬのだから、彼

の死に不可解さを募らせる。そして、その時、ネメシスや精霊達は、身をふるわせながらも自分の心を取りなおすマンフレッドをみて、彼の強さが人間離れしていることを認める。

Yet, see, he mastereth himself, and makes
His torture tributary to his will.
Had he been one of us, he would have made
An awful spirit. (II. iv. 161-4)

どんな事情のもとでも、自分の意志だけは押し通す強さは精霊達をも驚嘆させる。

第二幕の結末でマンフレッドは恋人との対面を果たし、同時に彼の偉大さ、独立心は精霊達も認めるところとなり、もう彼に残される選択は、破滅か救いかのいずれかである。こうして主人公を一つの頂点に至らしめると、第三幕の場面は再び冒頭の城の中となり、時刻は夕暮れ時となる。場面を冒頭に戻すことにより、読者はある程度まで明らかにされた彼の苦悩を最初の背景の中で見直し、成行きを見守る用意ができる。第三幕全体を通して、マンフレッドは自己の死の近いことを感じとっていることが主なモチーフとなる。もう一度人間、それも聖職者によって救いが差し延べられる。彼自らが「説明し得ない静寂」と表現する静まり返った城に修道院長が訪問し、「お前の命が危険だから救いに来た。罪から希望へと導く力を与えに来た」という。マンフレッドはこの申し出を断わり、最後に差し出される宗教の力をも拒否する。どんな人物にせよ、人間の仲介は断りたいという。彼の堂々と弧高を保つ態度に修道院長は彼の人物を次のように要約する。

This should have been a noble creature: he
Hath all the energy which would have made
A goodly frame of glorious elements,

Manfred

Had they been wisely mingled; as it is,
It is an awful chaos---light and darkness,
And mind and dust, and passions and pure thoughts
Mixed, and contending without end or order,---
All dormant or destructive---

(III. i. 160-7)

もしうまく混合されていたならば彼は立派な人物になるあらゆる要素を備えているが、現実の彼は光と闇、精神と塵、情欲と思想が混乱し、争いあっておそろしい混合となっている。全く破滅的だと嘆く。院長が用いる形容詞 'awful' は先の第二幕四場からの引用文に使われる精霊の使う 'awful' と同じである。すなわち、マンフレッドは人間から見ても、超自然の精霊から見ても、名状し難い「恐ろしく、畏怖を感じさせる」人物なのだ。

こうして次第に神秘的で不可解で高貴なマンフレッドを読者に印象づけると、もう一度大きく場面を転換して、城の中で生活する主人公が登場する。ドラマが終り近くなって、はじめて彼の実際の生活が語られるが、これは主としてマンフレッドの従者の口から知らされる。彼は毎晩徹夜で勉強しているが、何を勉強しているのか誰にも理解できない。その従者はマンフレッドの父に仕え、彼の誕生日前からこの城にいるが、マンフレッドは全く父に似ていない。兵士である父は誇り高かったが、陽気で、飲み騒ぎ、城は賑やかな日々であったと追憶する。それにひきかえ、マンフレッドは塔に閉じ籠り、彼の愛した唯一の人の思いにふけるばかりと心配する。従者は父を引合いに出し、マンフレッドの暗い影を別の角度から描き出す。ここで始めて読者はマンフレッドの亡霊のごとき存在から現実の人間であることを自覚する。従者の口から彼の家族のことが知らされると、彼に家族があるとは信じ難いような気持ちになる。宗教人や精霊と語り合ったマンフレッドが現実の身近な人から語られる。彼らから見てもマンフレッドは何をしているのかわからない人物であり、それを知ろうとすることすら危険であるという。そして塔の

中での恐るべきあの夜のことが語られ、このドラマが始まって以来、最も明瞭に近親相姦に話が及ぶ。

Count Manfred was, as now, within his tower, --
How occupied, we knew not, but with him
The sole companion of his wanderings
And watchings---her, whom of all earthly things
That lived, the only thing he seemed to love, ---
As he, indeed, by blood was bound to do,
The lady Astarte, his--- (III. iii. 41-7)

それまで何度となく影のように彼に付随した暗い罪、何度も彼自身や他の登場人物にほのめかされた罪がここでその事件が直接に語られ始めるが、修道院長の到来によって遮られ、全容が明かされる機会が失われる。

こうして従者の口から語られるマンフレッドの話が中断され、幾分読者を失望させ戸惑わせたところで、再び一人塔に閉じ籠ったマンフレッドの独白を聞く。夜空の星や月や雪の積もった山を眺めながら過去に思いを馳せている彼に、再登場した修道院長が彼を救おうとする。最後に述べる彼の言葉はやはり力強い独立である。「自分は生きてきたごとく一人で死ぬ」(III. iv. 90) と言い張り、更に挑戦的に言葉を続ける。

I do defy ye, ---though I feel my soul
Is ebbing from me, yet I do defy ye;
Nor will I hence, while I have earthly breath
To breathe my scorn upon ye---earthly strength
To wrestle, though with spirits; what ye take
Shall be ta'en limb by limb.

(III. iv. 99-104)

Manfred

この段階に至るとマンフレッドは魂も自らの身体から抜けていくが、それでも服従を拒否する。この世に息をする限りは霊をさげすみ、戦うと言明する。精霊達は「何と扱いにくい人間か」(III. iv. 105) と驚きの反応を示し、マンフレッドが他の生命あるものとは異なった存在であることを再認識する。彼の最後の言葉は自分は生きてきたように死に、死んでも自分は自分だという強い自己主張である。

I have not been thy dupe, nor am thy prey---

But was my own destroyer, and will be

My own hereafter.

(III. iv. 138-40)

結末の死の直前の彼の台詞は死にたいする勝利と修道院長の宗教的救済の否定を意味する。どこまでも自分を支配するのは自分であるという主張はバイロン風英雄そのものである。彼のこの強い意志は読者に印象づけられるが、この場面でもなぜ彼が死に至るかは明らかでない。またどうしてアスターティが死に追いやられたかの事情も語られない。マンフレッドはアスターティのところへ行ったのだろうか。それもわからない。ただ彼の死と、悪魔達すら認める不屈の精神だけが残る。この精神はプロメシウスそのものであるが、シェリーのプロメシウス程の気高い人類愛の裏付けはなく、またバイロンの短い詩 "Prometheus" で詠ったような人間の代表としての崇高さも持ち合わせていない。これらに描かれるような自己犠牲は見られず、死は勝利とはなっていない。マンフレッドの不屈の精神は彼個人の内面の苦悩に由来する。それは陰鬱なものではあるが、どんな苦悩の時も自己を譲らず、忍耐に徹する一生はやはりプロメシウスであり、しかもバイロン風英雄である。この詩はドラマの形をとってこの心理過程を描き出したものである。この意味において William H. Marshall が "psychological rather than philosophic drama"⁷⁾と評したのは適切である。

この作品には脇筋が全くなく、単調で反復が多いことは Rutherford (p.

91) も指摘するとおりである。主人公が後悔の人、苦悩の人という設定が出来上がると、精霊、アルプスの自然、狩人、魔女と一連の登場人物を相手に少しずつ角度を変えながら彼の内面に迫る。その度毎に、暗い罪は「表現し得ないもの」というかすかな暗示から次第に具体化され、読者に理解されるようになる。それでも事件そのものの描写はなく、事件の投影にすぎず、罪の名残という範囲からは一步もでない。後半第三幕になってようやく従者から聞かされる噂話が唯一の直接的な話である。読者の前に父や従者をもつ現実世界の人間としてのマンフレッドが登場するのもこの場面のみで、それ以外は亡霊を見ているようである。ちょうどハムレット、ファウスト、プロメシウスの混合した人物で、しかも究極において Trueblood も言うようにバイロンその人である。

この比較的単調な作品の特徴は、一人の人間の内面が舞台に影のように投影されることである。暗い罪の深刻さに比べて、舞台の上では具体性がなく、実体のないものである。主人公を取り巻く世界は大半ゴシックの舞台で、城のギャラリー、亡霊、精霊、悪魔などに終始し、美しいアルプスの自然もゴシックの世界の主人公が探訪する別世界としての役割を果たす。Philip M. Martin が作品全体を "Gothic extravagance"⁸⁾と呼んでいるのは妥当である。その「放縦」が実際には何も起こらず、そのムードが影のように漂うのみである。読者は神秘と暗さに包まれたマンフレッドの心の中がスクリーンに映し出されるのを鑑賞し、そのムードにひたり雰囲気共感を覚えて本を閉じる。

注

- 1) E. H. Coleridge and R. E. Prothero, ed, *The Works of Lord Byron: Letters and Journals* (London: John Murray, 1889-1904), IV. 54-5. February 15, 1817.
- 2) William J. Calvert, *Byron: Romantic Paradox* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1935), p. 173.
- 3) Peter Thoreslev, *The Byronic Hero: Types and Prototypes* (Minnea-

Manfred

- polis: University of Minnesota Press, 1962), pp.175-6.
- 4) Paul G. Trueblood, *Lord Byron* (Boston: Twayne Publishers, 1977), p.88.
- 5) Jerome J. McGann, *Byron's Complete Poetical Works* (New York: Oxford University Press, 1978-84). *Manfred*, I.i.1-8.
本稿におけるバイロンの詩の引用はすべてこの版による。
- 6) Andrew Rutherford, *Byron: A Critical Study* (Stanford: Stanford University Press, 1961), p.80.
- 7) William H. Marshall, *The Structure of Byron's Major Poems* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1963), p.97.
- 8) Philip M. Martin, *Byron: A Poet Before Public* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), p.113.

(1988. 12. 1 受理)